

「この世界の光は闇より少しだけ多い」。こういった文句は、しばしば締め言葉、あるいは決めゼリフとして利用される。でも、ある気鋭のロシア文学者はそれで済まさず、そのあとにこう続ける。

「…という言葉が空虚な約束や気休めではなくなるためには、『原因』を問い続けることが必要なのだ」。※

私たちは日々、言葉の無力さを思い知らされている。やむにやまれぬ社会的発言の多くが、情報のひとつとして呆気なく消費されておわる。古池に投げ込んだ小石の波紋が、すぐにもとの濺んだ水面におさまる様に。その理由を、ロシアのロックグループの『空虚な約束』という曲を紹介しながら、この人は言い当てている。大事なのは原因を問うことだ、と。そんなことを3月末、東京でのデモ行進の最中、私は思い浮かべていた。

この国の農業、農政の惨状は、このままでは主食のコメさえも自国でまかなえなくなる。その危機的な現実を訴えようと全国から集まった農民たちがトラクターも伴い、長い列をなして歩いた。青山公園から表参道、原宿駅前を経て代々木公園まで。集合場所に入りきれず沿道での応援に

まわった人たちも含め、参加者4,500名。

この「令和の百姓一揆」に、自作ののぼり旗を掲げ、佐渡から仲間と一緒に加わった。実は私も放牧場管理人という農業労働者のはしくれだ。都会のビル群に反響する私たちの訴えは、しかし休日を楽しみ賑わう人びとの意識を、どれだけ変えることができたの

## 言葉が力を得るために

十文字 修

(じゅうもんじ おさむ)  
新潟県佐渡島在住

だろう。一回の催しでは無理なこと、全国におよぶ連続した行動や発信が必要なこと、それらはもちろん主催者の皆さんも承知している。

ならば連続した行動や発信を促すためにも、心がけたいことがある。それは、なぜ農業がこうなってしまったのか、その原因を探り当て提示することだ。物事はすべてそれが生起するにいたった理由がある。その原因ぐるみ解除することによってのみ、克服

の途はひらける。ならば原因までさかのぼり開示してみせてこそ、その訴えの言葉には力が宿るのではないか。

自分のことで恐縮ながら、私の二十代は普通の？エコロジー青年だった。けれど、というよりだからこそ、その後次第に、関心の重心は戦中から敗戦後にいたる日本人の精神の歩みに移っている。この国の無秩序な自然破壊も地球環境への無関心も、それをもたらした理由があると思ったから。その理由つまり原因を明らかにすることは、解決策そのものではないが、解決策を得るための必要条件にちがいない。

農業だけでなく、原発再稼働、医療危機、少子高齢化、格差拡大、そしてもちろん今日の気候変動まで、それらは人間がもたらしたものであり、原因は人間の中にある。さらにその奥には、直接の原因をもたらした更なる原因がある。なぜの五回掘り、という言い方があるそうだが、たしかに表層の常套句になった言い回しにとどまることなく、そのくらいの深掘りをしてみれば、解決の糸口を見出したり、ことなる分野間の新たな対話を生み出せるかもしれない。

※『夕暮れに夜明けの歌を』奈倉有里著（紫式部文学賞受賞）P.55より